

〈新刊紹介〉

藤井俊博著

『院政鎌倉期説話の文章文体研究』

本書は、院政鎌倉期の和漢混淆現象の動態を明らかにすることを目的としてまとめられた。前著『今昔物語集の表現形成』（和泉書院、2003年）に続き、本書では院政鎌倉期の説話集を対象とする。本書は、日本学術振興会平成27年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金、研究成果公開促進費、JSPS 科研費 15HP5075）の交付を受け、和泉書院研究叢書 468 として刊行された。本書の第一部では「けり」が果たす機能を論じ、第二部では文章・文体・語彙・表記などの面から和漢混淆文の生成における諸問題を論じる。

本書の構成の詳細は次の通りである。「序章 本書の目的と方法」に続いて、「第一部「けり」のテキスト機能をめぐる論」には、「第一章 今昔物語集の「けり」のテキスト機能——冒頭段落における文体的変異について——」、「第二章 今昔物語集の「けり」のテキスト機能——終結機能を中心に——」、「第三章 今昔物語集の「にけり」——テキスト機能の諸相——」、「第四章 宇治拾遺物語の「けり」のテキスト機能——今昔物語集・古事談との比較——」、「第五章 古本説話集の「けり」のテキスト機能——「にけり」「係り結び」の終結機能——」、「第六章 発心集の「けり」のテキスト機能——係り結びの使い分け——」、「第七章 沙石集の「けり」のテキスト機能——枠づけ表現の多様化——」。「第二部 説話の文章・文体・表記に関する論」には、「第八章 今昔物語集の接続語——「而ル間」「其ノ時ニ」を中心に——」、「第九章 今昔物語集の複合動詞——和漢混淆文の特徴語として——」、「第十章 今昔物語集の「カナシブ」「アハレブ」——仏教的感動をあらわす一用法——」、「第十一章 物語テキストの視点と文末表現」、「第十二章 今昔物語集の視点と文末形式——巻一六を例として——」、「第十三章 宇治拾遺物語の文章構造——話末評語を手がかりに——」、「第十四章 宇治拾遺物語の語彙と文体——古事談との比較を通して——」、「第十五章 打聞集の表記と単語意識——宣命書きの例外表記を中心に——」、「第十六章 法華百座開書抄の宣命書きについて」。末尾に、「初出一覧」、「索引（主要語句・人名・事項）」、「あとがき」を付す。

（2016年1月25日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 384頁 8,000円＋税 ISBN 978-4-7576-0776-7）

今野真二著

『仮名遣書論攷』

本書は、仮名遣書を日本語学史の側から論じた書であり、仮名遣書がまとめられた文字社会を含め、仮名遣書とその時期の日本語との関わりについても論じる。本書は、これまでの著者の仮名遣書に関する論考に加筆修正を行ってまとめられ、和泉書院研究叢

書 469 として刊行された。

本書の構成は以下の通りである。「序章 仮名遣書の概観」, 「第一章 『仮名文字遣』」, 「第二章 『新撰仮名文字遣』」, 「第三章 中世末から近世初期にかけて編まれた仮名遣書」, 「第四章 『類字仮名遣』『初心仮名遣』」, 「第五章 契沖『和字正濫抄』」, 「第六章 『古言梯』」, 「第七章 『古言梯』に連なる仮名遣書」, 「おわりに」, 「註」, 「付 影印 清泉女子大学付属図書館蔵『新撰仮名文字遣』, 異本『新撰仮名遣』」。末尾に、「索引」と「あとがき」を付す。

(2016年2月6日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 360頁 10,000円+税 ISBN 978-4-7576-0777-4)

森勇太著

『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』

本書は、日本語の授受表現の歴史を論じたものであり、言語運用面・語用論的側面からの考察も重要であるとし、敬語との対照という手段を採用している点が特徴的である。

本書の構成は次の通りである。「はじめに」に続き、「Ⅰ 授受表現・敬語の構造と歴史」に「第1章 授受表現の歴史的研究と敬語・発話行為」, 「第2章 授受表現と敬語の構造」, 「第3章 授与動詞「くれる」の視点制約の成立——敬語との対照から——」, 「第4章 補助動詞「てくる」の成立——動作の方向性を表す用法の成立をめぐる——」, 「Ⅱ 行為指示表現から」に「第5章 行為指示表現の歴史の変遷——尊敬語と受益表現の相互関係の観点から——」, 「第6章 近世上方における連用形命令の成立——命令形式の三項対立の形成——」, 「Ⅲ 行為拘束表現から」に「第7章 申し出表現の歴史の変遷——謙譲語と与益表現の相互関係の観点から——」, 「第8章 オ型謙譲語の用法の歴史——受益者を高める用法をめぐる——」, 「第9章 前置き表現の歴史の変遷——国会会議録を対象として——」, 「第10章 授受表現と敬語の相互関係の歴史」を収める。末尾に「おわりに」, 「資料」, 「参考文献」, 「索引」が付く。

なお、本書は、平成22-23年度科学研究費補助金(10J03398)、平成24年度科学研究費補助金(12J00716)、平成25-26年度科学研究費補助金(258840821)による研究の成果であり、平成27年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費, 15HP5069)の助成を受けて、ひつじ研究叢書〈言語編〉第133巻として刊行された。

(2016年2月16日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 231頁 7,000円+税 ISBN 978-4-89476-774-4)

中山緑朗著

『日本語史の探訪——記録語・古辞書・文法・文体——』

本書は、記録語と文法研究史に関する著者のこれまでの論考をまとめた退官記念論文集である。『平安・鎌倉時代古記録の語彙』(東苑社, 1995年)と『動詞研究の系譜——研究と資料——』(明治書院, 1999年)に収録されない論文等も含まれる。

「第一章 記録語」には「第一節 日本語における漢語の来し方と行く末」,「第二節 大型国語辞典・古語辞典における記録語の扱い——斎木一馬氏の提言をめぐって——」,「第三節 漢字其儘と漢字離れ——日本漢語の史的変遷——」,「第四節 記録語散策」,「第五節 平安時代古往来語彙と古記録語彙の関連について」,「第六節 中世武家法に見る漢語の源流——『御成敗式目』をめぐって——」,「第七節 和製・和化漢語の源流——中世刑罰用語に見る——」,「第八節 記録語彙の変遷——『民経記』を軸として——」,「第九節 中世の記録語彙散策——「莫言」「有若亡」「物騒」——」,「第十節 『康富記』の語彙——室町期語彙一斑——」,「第十一節 『実隆公記』の語彙——感情表現を中心に——」,「第十二節 近代技術の導入と翻訳語」。

「第二章 古辞書」には「第一節 中世古辞書『下学集』注記に見る〈世話〉と〈俗〉——その和製漢語意識について——」,「第二節 『和名類聚抄』の受容史一斑——『塵袋』『塵添搥囊抄』の場合——」,「第三節 中世の辞書——『下学集』・『和玉篇』・『聚分韻略』・『塵袋』・『塵添搥囊抄』——」,「第四節 名語記——鎌倉時代の奇書・珍書——」。

「第三章 文法」には「第一節 幕末・明治期の日本語文法研究——「下一段活用」をめぐる動向を中心に——」,「第二節 西周の日本語文法論」,「第三節 外国人による日本語文法研究」,「第四節 学校文法の意義と目的」。

「第四章 文体」には「第一節 『海道記』の諸本——「岩瀬文庫本」「相模女子大本」「熊本大学永青文庫本」について——」,「第二節 『海道記』の表記——「尊経閣文庫蔵鎌倉紀行」を中心に——」,「第三節 『海道記』の文章——旅と風景描写(一)——」,「第四節 『海道記』の文章——旅と風景描写(二)——」,「第五節 みすゞの世界——みすゞの文体・用語——」,「第六節 司馬遼太郎の文学世界——文体・用語——」。

末尾に「初出一覧」,「あとがき」,「著者略歴」を付す。

(2016年2月20日発行 おうふう刊 A5判縦組み 368頁 12,000円+税 ISBN 978-4-273-03777-2)

藤本灯著

『色葉字類抄』の研究

本書は、『色葉字類抄』の特徴を多くの視点から明らかにしようとする書である。収録語彙の平安時代における性格,他文献との影響関係,国語資料としての価値,伝本の系統などといった様々な分析の観点から、『色葉字類抄』を総合的に捉え直す。本書は,平成27年度日本学術振興会科学研究費補助金(研究成果公開促進費:学術図書)の助成を受け刊行された。

本書の構成は次の通りである。「序」,「緒言」,「凡例」に続き,「第一章 目的と方法」には「第一節 本研究の目的」,「第二節 先行研究のまとめ」,「第三節 本研究の方法」。「第二章 『色葉字類抄』収録語彙の性格(一)」には,「第一節 先行研究」,「第二節 暁字部語彙の性格——イ篇語彙の性格——」。「第三章 『色葉字類抄』収録語彙の性格(二)」には,「第一節 暁字部語彙の性格——訓読の語の性格——」,「第二節 暁字部語彙の性格——長暁字の性格——」,「第三節 『色葉字類抄』収録語彙の性格」。「第四章 『色葉字類抄』と他文献との関連」には「第一節 先行研究」,「第二節 他文献との関連」,「第

三節 『色葉字類抄』と先後辞書。「第五章 国語資料としての『色葉字類抄』」には「第一節 先行研究」,「第二節 字音から見た『色葉字類抄』——仏法部語彙を中心に——」,「第三節 仏法部語彙から見た『色葉字類抄』——用例を中心に——」,「第四節 『色葉字類抄』の価値」。「第六章 字類抄諸伝本」には、「第一節 伝本調査の意義」,「第二節 『節用文字』と『世俗字類抄』」,「第三節 二卷本・三卷本・花山院本『色葉字類抄』」,「第四節 一〇卷本『伊呂波字類抄』」,「第五節 まとめと展望」,「付節 一〇卷本『伊呂波字類抄』書誌一覧」。「終章 結論」には、「第一節 本論のまとめ」,「第二節 結論」,「第三節 今後の課題」。末尾に「色葉字類抄 影印・索引目録」,「色葉字類抄研究文献」,「構成論文初出一覧」,「後記」,「索引(書名索引・人名索引・第六章「いろは字類抄」所蔵機関索引)」を付す。

(2016年2月26日発行 勉誠出版刊 A5判縦組み 814頁 15,000円+税 ISBN 978-4-585-28023-1)

三保忠夫著

『鷹書の研究——宮内庁書陵部蔵本を中心に——』

本書は、日本放鷹文化史上、質・量ともに卓越した資料群である宮内庁書陵部蔵「鷹書」全737点の悉皆調査の成果を中心に、「鷹書を手にした人々」(鷹書の著述・相伝・書写・伝領・研究・架蔵等に関わった人)との関連から鷹書を整理・解説し、鷹書に見られる「鷹狩の言葉」を論じ、さらに、「鷹詞」資料数点の翻刻を行うことで、「鷹書」についての総合的な研究を展開した、上下合わせて2200頁以上に及ぶ大著である。和泉書院研究叢書472として刊行された。

本書の構成は、次の通りである。最初に、「まえがき」と「第一部 宮内庁書陵部所蔵の鷹書——総論——」を置き、次いで、「第二部 宮内庁書陵部所蔵の鷹書」として、「第一章 公家に関わる鷹書」,「第二章 中世武家に関わる鷹書」,「第三章 公儀鷹匠・鷹匠同心など(三卿におけるを含む)に関わる鷹書」,「第四章 松江藩鷹方関係者(絵師・医師等を含む)に関わる鷹書」,「第五章 徳川将軍家・幕臣、諸侯・諸藩鷹匠などに関わる鷹書」,「第六章 絵師、僧侶などに関わる鷹書」,「第七章 有職故実家、国学者・文人、連歌師などに関わる鷹書」,「第八章 李氏朝鮮の王族、医学者に関わる鷹書」,「第九章 未詳の人物に関わる鷹書」,「付章 『大緒繫形集』について」に分かって解説し、「第三部 鷹詞の研究」として、「第一章 鷹狩言葉の諸相」,「第二章 鷹詞の研究資料(翻刻)」,「第三章 宮内庁書陵部蔵『鷹詞 江戸ト出雲之相違書上』(翻刻・注釈)」を示す。巻末には、「本書に関連する既発表の論文・口頭発表・講演」,「索引」(Ⅰ書名索引 Ⅱ人名索引 Ⅲ事項索引)、「あとがき」を付す。

(2016年2月29日発行 和泉書院刊 A5判横組み 上・下2冊 計2288頁 28,000円+税 ISBN 978-4-7576-0782-8)

濱千代いづみ著

『中世近世日本語の語彙と語法——キリシタン資料を中心として——』

本書は、天草版『エソポのハブラス』、古活字本『伊曾保物語』、天草版『平家物語』を対象に計量的手法を取り入れながら中世近世における日本語の語彙と語法を明らかにしようとする書である。著者のこれまでの論考を加筆修正し、まとめられた。本書は、岐阜聖徳学園大学学術図書出版助成を受け、和泉書院研究叢書 474 として刊行された。

本書の構成は次の通りである。「第一部 天草版『エソポのハブラス』の語彙と語法」には、「はじめに」、「第一章 天草版『エソポのハブラス』の自立語の語彙」、「第二章 天草版『エソポのハブラス』・天草版『平家物語』の語彙の豊富さ、類似度、偏り」、「第三章 天草版『エソポのハブラス』の助動詞の語彙と語法」、「第四章 天草版『エソポのハブラス』の助詞の語彙と語法」、「おわりに」。「第二部 古活字本『伊曾保物語』・『教訓近道』の疑問表現」には、「はじめに」、「第一章 古活字本『伊曾保物語』の疑問詞疑問文」、「第二章 古活字本『伊曾保物語』の肯否疑問文」、「第三章 『教訓近道』の疑問表現——『伊曾保物語』との比較を通して——」、「おわりに」。「第三部 天草版『平家物語』・天草版『エソポのハブラス』の助数詞と数詞」には、「はじめに」、「第一章 天草版『平家物語』の助数詞と数詞」、「第二章 天草版『エソポのハブラス』の助数詞と数詞」、「おわりに」。末尾に「あとがき」と「索引」を付す。

(2016年3月1日発行 和泉書院刊 A5判横組み 366頁 9,000円+税 ISBN 978-4-7576-0784-2)

定延利之著

『コミュニケーションへの言語的接近』

本書は、現在の言語研究において一般的に想定されるコミュニケーション観に共通する4つの特徴を取り上げ、発話の音声の特徴をはじめとした様々な観点から現代日本語の話しことばにおける現象の考察を通してそれぞれを検証し、その問題点を具体的に明らかにしたものである。

本書の構成は次の通りである。「第1章 はじめに」、「第2章 前提」、「第3章 伝達を前提とするコミュニケーション観の批判的検討」、「第4章 意図を前提とするコミュニケーション観の批判的検討」、「第5章 共在を前提とするコミュニケーション観の批判的検討」、「第6章 行動を前提とするコミュニケーション観の批判的検討」、「第7章 おわりに」。末尾に「あとがき」、「言及文献」、「索引」が付く。

なお、本書は、平成27-30年度科学研究費補助金による基盤研究(A)「つかえタイプの非流ちょう性に関する通言語的調査研究」(15H02605)等の複数のプロジェクトの成果を含んでいる。ひつじ研究叢書〈言語編〉第129巻として刊行された。

(2016年3月8日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 356頁 4,800円+税 ISBN 978-4-89476-762-1)

相澤正夫・金澤裕之編

『SP 盤演説レコードがひらく日本語研究』

本書は、芸能史研究者、岡田則夫氏が提供・編集・監修したデジタル音源集所収の20世紀前半の演説レコード音源、および、編者らが作成した文字化資料データを対象に、多岐にわたる専門領域を持つ共同研究者による「多角的アプローチ」によって展開された研究成果報告集である。

本書の構成は、次の通りである。冒頭に、「はじめに（相澤）」と「[資料解説] SP 盤レコードと岡田コレクション（金澤）」を置き、以下、「I 音源資料がひらく音声・発話の研究」として、「1 幕末～明治前期のガ行鼻音を推定する（相澤）」、「2 大正期演説のピッチ——ピッチレンジおよび大隈演説の final lowering について——（高田三枝子）」、「3 大正～昭和前期の演説・講演における漢語の読みのゆれ（松田謙次郎）」、「4 戦時中の広報——東京市情報課の「巻き込み」手法——（東照二）」、「II 文字化資料がひらく文法・形式の研究」として、「1 大正～昭和前期の演説・講演レコードに見る「テおる／テいる」の実態（金澤）」、「2 大正～昭和前期における助動詞マスの終止・連体形について——マスの使用状況を中心に——（岡部嘉幸）」、「3 従属節の主語表示「が」と「の」の変異（南部智史）」、「4 大正～昭和前期の丁寧語諸表現の動態（尾崎喜光）」、「III 文字化資料がひらく文体・表現の研究」として、「1 条件表現の用法から見た近代演説の文体（矢島正浩）」、「2 大正～昭和前期における演説の文体（小椋秀樹）」、「3 演説の文末表現の変遷——明治時代から昭和10年代まで——（田中牧郎）」、「4 大正～昭和前期の演説に現れる文末表現のバリエーション（丸山岳彦）」の各論考を掲げ、末尾に、「あとがき」に代えて——文字化を巡るこぼればなし——（金澤）」を置く。

なお、本書は、国立国語研究所の基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」（リーダー：相澤正夫、2009～2015年度）の一環として実施されたサブ・プロジェクトの研究活動を基盤とする。

（2016年3月10日発行 笠間書院刊 A5判横組み 308頁 3,900円＋税 ISBN 978-4-305-70795-6）

寺島浩子著

『あいさつ言葉』の魅力——京言葉を起点として——』

本書は、「京言葉」のあいさつに関わる表現を、年代差を含む多くの場面から記述した書である。前著『町家の京言葉——明治30年代生まれ話者による 付 近世後期上方語の待遇表現——』（武蔵野書院、2006年）と『町家の京言葉分類語彙篇——明治30年代生まれ話者による——』（武蔵野書院、2010年）を踏まえながら、あいさつに焦点を当てる。

本書の構成は次の通りである。「はじめに」、「まえがき」、「第一章「京言葉」考」、「第二章 藤原与一氏の著述における「あいさつことば」、「第三章 「あいさつ・あいさつ

言葉」の諸相」,「第四章 町家の京言葉における家庭内のあいさつ言葉」,「第五章 町家の京言葉における他家訪問のあいさつ言葉」,「第六章 町家の京言葉における他処での出会いのあいさつ言葉」,「第七章 町家の京言葉における分類別あいさつ言葉」,「第八章 京都町家の年代差に着目したあいさつ言葉」,「第九章 「京ことばを語ろう会」に対するあいさつ言葉の調査」,「第十章 「あいさつ言葉」の魅力——京言葉を起点として——」。末尾に「おわりに」,「参考文献」,「あとがき」を付す。

(2016年3月10日発行 武蔵野書院刊 四六判縦組み 368頁 3,500円+税 ISBN 978-4-8386-0462-3)

小西いずみ著

『富山県方言の文法』

富山県方言の文法を,言語地理学的知見や方法を踏まえ総合的・体系的に記述したのが本書である。本書は,2007年度に東北大学大学院文学研究科へ提出された博士論文に基づいてまとめられ,ひつじ研究叢書〈言語編〉第130巻として刊行された。

本書の構成は次の通りである。「序章 本書の背景・目的・方法」に続いて,「Ⅰ 地理的分布からのアプローチ」では「第1章 地理的分布から見た富山県方言の文法」と「第2章 コピュラの分布とその形成過程」において地理的分布の側面から文法特性と形成過程を論じる。「Ⅱ 記述的アプローチ1 総合的記述」として掲げられた「第3章 富山県方言の文法体系」では対象を富山市に絞り,総合的な文法体系の記述を行う。続いて,「Ⅲ 記述的アプローチ2 文法事象・文法形式各論」の部は,「第4章 用言の音韻交替とその機能」,「第5章 s語幹動詞イ音便化の例外語」,「第6章 下新川方言における形容名詞述語の活用」,「第7章 形容詞の副詞化形式「ナト・ラト」と「カニ」」,「第8章 引用標識のゼロ化とその要因」,「第9章 提題・対比的とりたての助詞「チャ」」から構成され,当該方言に特徴的な文法事象・形式を取り上げ,共時的・通時的意味付けを行いながら分布形成過程を明らかにする。結論として,「終章 本書の成果と課題」が示される。末尾に,「参考文献」,「本書と既発表論文との関係」,「あとがき」,「索引」を付す。

(2016年3月15日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 376頁 8,000円+税 ISBN 978-4-89476-763-8)

王其莉著

『判断のモダリティに関する日中対照研究』

本書は,著者が2012年に東北大学に提出した博士論文「判断のモダリティに関する日中対照研究」をもとに加筆・修正してまとめられたものである。判断のモダリティについて,その下位分類として評価判断のモダリティと真偽判断のモダリティを考え,それぞれに属する日中両言語の対応する形式に関する研究を収めている。両言語において対応関係にある形式の共通点および相違点を明らかにするだけでなく,相違点を生じさ

せる原因や何が言語間の違いと言えるのかという点についても考察している。本書は、ひつじ研究叢書〈言語編〉第138巻として刊行された。

本書の構成は次の通りである。「まえがき」に続き、「Ⅰ 序」に「第1章 対照研究と本書の立場」, 「第2章 モダリティに関する先行研究の概観」, 「第3章 本書の対象と構成」, 「Ⅱ 評価判断のモダリティ」に「第4章 日本語の「なければならない」と中国語の“必須”」, 「第5章 日本語の「べきだ」と中国語の“应该”」, 「第6章 日本語の「てもいい」と中国語の“可以”」, 「Ⅲ 真偽判断のモダリティ」に「第7章 日本語の「だろう」と中国語の“吧”」, 「第8章 日本語の「かもしれない」と中国語の“也许”“可能”」, 「第9章 日本語の「はずだ」と中国語の“应该”」, 「第10章 日本語の「ようだ」「らしい」と中国語の“好像”」, 「Ⅳ 評価判断のモダリティと真偽判断のモダリティのかかわり」に「第11章 評価判断のモダリティと真偽判断のモダリティのかかわり」, 「第12章 日本語の「べきだ」「はずだ」と中国語の“应该”」, 「Ⅴ 様々な日本語表現と対応する中国語の“会”」に「第13章 中国語の“会”について「能力」「長じている」以外の意味を対象に」, 「第14章 結論」を収める。末尾に「初出一覧」, 「参考文献」, 「あとがき」, 「刊行によせて(斎藤倫明)」, 「索引(述語編・人名編)」が付く。(2016年3月16日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 272頁 7,200円+税 ISBN 978-4-89476-808-6)

井上史雄・木部暢子編著

『はじめて学ぶ方言学——ことばの多様性をとらえる28章——』

本書は、一般の読者や大学の教科書としての使用を視野に入れた方言の概説書である。各章の冒頭には要点とキーワードが付され、末尾には各テーマに沿った練習問題、読書案内が掲げられる。

本書の構成は次の通りである。「はじめに」, 「序章 日本語方言の概観(井上史雄)」に続き、「第Ⅰ部 日本語方言の分布と形成」には、「第1章 方言と言語・標準語・生活語(日高水穂)」, 「第2章 日本語方言の形成過程(小林隆)」, 「第3章 日本語方言の区画(鍵水兼貴)」, 「第4章 日本の方言地理学(大西拓一郎)」, 「第5章 海外の日本語方言(朝日祥之)」。「第Ⅱ部 現代の日本語方言」には、「第6章 共通語化(村上敬一)」, 「第7章 新方言(半沢康)」, 「第8章 気づかない方言(早野慎吾)」, 「第9章 首都圏のことば(三井はるみ)」, 「第10章 現代関西方言(高木千恵)」, 「第11章 ウチナーヤマトウグチ(中本謙)」。「第Ⅲ部 日本語方言の音声・音韻」には、「第12章 方言の音声・音韻(大野眞男)」, 「第13章 方言のアクセント(木部暢子)」, 「第14章 方言のイントネーション(郡史郎)」。「第Ⅳ部 日本語方言の文法」には、「第15章 方言の活用(有元光彦)」, 「第16章 格表現(佐々木冠)」, 「第17章 テンス・アスペクト表現(沖裕子)」, 「第18章 可能表現(渋谷勝己)」, 「第19章 授受表現(日高水穂)」, 「第20章 方言の文末詞(井上優)」。「第Ⅴ部 日本語方言の語彙」には、「第21章

方言の語彙・意味（新井小枝子）, 「第22章 方言の語種（澤村美幸）」。「第Ⅵ部 日本語方言の談話・行動」には, 「第23章 方言の敬語（井上史雄）」, 「第24章 方言と行動（篠崎晃一）」, 「第25章 方言とマスコミ（塩田雄大）」, 「第26章 方言と医療（今村かほる）」, 「第27章 方言の拡張活用と方言景観（田中宣廣）」。末尾に「索引」と「執筆者紹介」を付す。

（2016年3月31日発行 ミネルヴァ書房刊 A5判横組み 312頁 2,800円＋税 ISBN 978-4-623-07520-1）

国語文字史研究会編

『国語文字史の研究十五』

本書は、『国語文字史の研究』第十五集として編まれたものである。

本書に収録された論集は次の通りである。「『万葉集』の表記をめぐって（今野真二）」, 「和名類聚抄地名の訓注の仮名（蜂矢真郷）」, 「漢語の表記と古辞書の位相——「燈籠」の場合——（高橋忠彦・高橋久子）」, 「会意によらない一つの国字の消長——「題」を中心に——（笹原宏之）」, 「「韌」「韌」／「鞞」／「鞞」——「強韌」の「韌」——（山本秀人）」, 「『和名正濫鈔』は仮名遺書か（長谷川千秋）」, 「洒落本における振り仮名付記率の推移とその意味（久田行雄）」, 「近世における文字教育の一側面——変体仮名習得をめぐって——（矢田勉）」, 「近代日本における俗字と略字の差異（山下真里）」, 「漢字の「表意的用法」による表記とその解釈（尾山慎）」, 「〈資料紹介〉元禄六年刊『四書画引』（米谷隆史）」。末尾に, 「書名索引」, 「人名索引」, 「用語索引」, 「語彙索引」, 「仮名索引」, 「漢字索引」を付す。

（2016年3月31日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 252頁 8,000円＋税 ISBN 978-4-7576-0796-5）

国語語彙史研究会編

『国語語彙史の研究三十五』

本書は、『国語語彙史の研究』の第三十五集である。特集テーマである「コーパスと語彙史」には, 「古典語研究におけるコーパス検索と言語の構造との関係（近藤泰弘）」, 「使用頻度から見た中古仮名文学作品の語彙——コーパスにもとづく分析——（小木曾智信）」, 「中古語複合形容詞〔名詞＋評価形容詞〕の一語性（池上尚）」, 「文が長くなる要因——「尾張国解文」を例に——（富士池優美）」, 「近代における「期待」の基本語化——雑誌コーパスによる記述——（田中牧郎）」, 「『国民之友コーパス』を利用した近代文語文に出現する一人称代名詞の計量的分析（近藤明日子）」, 「『上方はなし』コーパスを通してみる京阪方言語彙——近世上方語及びナラン・イカン・アカンの語相——（竹村明日香）」, 「「英霊」の語誌（利岡真帆）」, 「近代における時間語彙——「最近」と「近時」を中心に——（山際彰）」。

その他の論文には, 「接尾語カ・ク・コ〔処〕（蜂矢真郷）」, 「さざれ石のいはほとなりて——語彙から見る石の一生——（吉野政治）」, 「平安時代の変体漢文諸資料間における言語的性格の相違について（田中草大）」, 「五山・博士家系抄物における濁音形〈候〉につ

いて(山本佐和子)],「画咄作品群の資料性——「文字と絵」の研究にむけて——(乾善彦)],『『語厄利亜語林大成』の語釈(今野真二)],「昭和戦前期の総合月刊誌における言語規範意識研究資料——「現代語考」(1935)——(新野直哉)」。末尾に「語彙索引」,「人名・書名・事項索引」を付す。

(2016年3月31日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 304頁 9,000円+税 ISBN 978-4-7576-0797-2)

田窪行則・ジョン・ホイットマン・平子達也編

『琉球諸語と古代日本語——日琉祖語の再建にむけて——』

本書は、琉球諸語と古代日本語を対象とした研究を収めた論文集であり、2012年2月に京都大学で行われた若手研究者による国際ワークショップ「琉球諸語と古代日本語に関する比較言語学的研究」の発表を中心にさらにいくつかの論文を加えたものである。

本書の構成は次の通りである。「はじめに」に続き、「第1部 古代日本語」には「第1章 古語辞典における実証形と推定形——上代語を主として——(早田輝洋)」、「第2章 日琉祖語の音韻体系と連体形・已然形の起源(ジョン・ホイットマン)」、「第3章 上代東国語の移動動詞について——コーパスによる研究——(ケリー・ラッセル)」、「第4章 諺文以呂波雑考(スエン・オースタクンプ)」、「第5章 平安時代語アクセント再考——式(語声調)は幾つあったのか——(平子達也)」、「第2部 琉球諸語の歴史的研究」には「第6章 日琉祖語の分岐年代(トマ・ペラール)」、「第7章 琉球諸語のアスペクト・テンス体系を構成する形式(かりまたしげひさ)」、「第8章 声調言語としての宮古祖語——特にそのTBUとして機能する韻律上の単位について——(松森晶子)」、「第3部 琉球諸語の共時的的研究」には「第9章 南琉球与那国語の格配列について(下地理則)」、「第10章 徳之島浅間方言の名詞アクセント体系(上野善道)」、「第11章 琉球諸語のアロキュティビティー(アントン・アントノフ)」、「第12章 ドゥナン(与那国)語の動詞形態論(山田真寛)」の各論文を収める。末尾に、「おわりに」、「索引」、「執筆者紹介」が付く。

(2016年4月15日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 303頁 3,800円+税 ISBN 978-4-87424-692-4)

柳田征司著

『日本語の歴史6 主格助詞「ガ」の千年紀』

本書は、日本語文法史に起きた最も重大な出来事を主格助詞「が」の確立であったと考える著者が、係り結びの衰退、疑問表現の転換、情意的表現から論理的表現志向への変化といった古代から近代に至る日本語文法史を、「主格助詞「ガ」の千年紀」として説明を試みたものである。

本書の構成は、次の通りである。「はじめに」に続き、「一 文法史研究上の中心課題」、「二 係り結び衰退の原因を解く突破口」、「三 文中の「ヤ」による疑問表現と文末の「カ」による疑問表現」、「四 文中の「ヤ」(要判定)「カ」(要説明)による疑問表現の

衰退], 「五 うなぎ文はどこから来たか」, 「六 係助詞「ゾ」「ナム」の衰退」, 「七 係り結びの起源」, 「八 「コソ」と「ハ」「モ」と副助詞の場合」, 「九 主格助詞「ガ」の確立」からなる。結論として、「おわりに」と「あとがき」を置く。

(2016年4月15日発行 武蔵野書院刊 四六判縦組み 240頁 2,000円+税 ISBN 978-4-8386-0464-7)

金智賢著

『日韓対照研究によるハとガと無助詞』

本書は、現代日本語の談話におけるハ、ガおよび無助詞とその韓国語における対応形式を対象とした対照研究であり、著者が2009年に東京大学に提出した博士論文「現代韓国語と日本語の談話における無助詞について——主語名詞句および文頭名詞句を中心に——」をもとに加筆・修正してまとめられたものである。ハとガだけでなく無助詞を含んだ対立構造を考えており、自然談話資料を対象とした計量的分析、語用論的分析によって具体的に検証されている点が特徴的である。

本書の構成は次の通りである。「はしがき」, 「第1章 ハとガと無助詞の理解」, 「第2章 周辺現象における基本的な考え方」, 「第3章 文における eun/neun と i/ga と無助詞【韓国語】」, 「第4章 文におけるハとガと無助詞【日本語】」, 「第5章 典型的な無助詞文と現場性」, 「第6章 限定的現場性と例外」, 「第7章 助詞類の使用における韓国語と日本語の違い」, 「第8章 情報構造と主題」, 「第9章 助詞類と主題」, 「第10章 課題と展望」。末尾に「参考文献」, 「付録I (例文のグロスについて)」, 「付録II (資料における発話文の分析(Coding)基準について)」, 「索引」が付く。

なお、本書は、2014年大韓民国教育部と韓国学中央研究院(韓国学振興事業団)を通じて海外韓国学中央大学育成事業(AKS-2014-OLU-225002)の支援を受けた研究の成果であり、東京大学韓国語研究部門の「韓国学中央研究院・海外韓国学中核大学育成事業東京大学韓国学研究者育成事業学術成果刊行助成制度」による助成を受け、ひつじ研究叢書〈言語編〉第137巻として刊行された。

(2016年5月9日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 315頁 7,800円+税 ISBN 978-4-89476-789-8)